

自然災害型ダークツーリズムにおける観光者開発

Tourist Development and Dark Tourism on the Type of Natural Disasters

井出 明¹
Akira IDE¹

佐藤翔輔²
Shosuke SATO²

¹追手門学院大学 経営学部

Faculty of Management, Otemon Gakuin University

²東北大大学 災害科学国際研究所

International Research Institute for Disaster Science, Tohoku University

Dark tourism, which deals with grief in human history, has the function of succession to memories about not only war places like Hiroshima and Nagasaki but also natural disasters like The Great Kanto earthquake on 1911. This paper will discuss the way to find “tourists” to partake in grief memories about natural disasters. Concretely speaking, applying the method of audience development on art management to tourism studies, possibilities of planning of social experiments will be analyzed.

Keywords : Dark Tourism, Natural Disaster, Grief Memories, Art Management, Tourist Development

1. ダークツーリズムにおける観光者の掘り起こし

戦争や災害をはじめとする人類の悲しみの記憶をめぐるダークツーリズムに関する研究は、ここ数年で急速に深まりつつあるが、新たに観光客を掘り起こし、誘客につなげる方法論に関する議論はほとんどなされていない。残念ながら、ダークツーリズムの妥当性や事例報告に関する論点が中心となっている。

しかし、現在、ダークツーリズムの重要性や効用については、認める論者が増えつつある^[1]。そして、この新しい観光の形態が大きな可能性を有することについてはほぼ議論が固まって来ている。とすれば、ダークツーリズムと言う新しいタイプの旅への参加者をどのように掘り起こすのかという点について真剣に検討されるべき時期が来ていると言えよう。

2. 「客」はどこにいるのか？

ダークツーリズムの観光者について、ヨーロッパの初期の研究では、確かに単に変わった人たちが戦跡を訪れていると言う程度の認識で語られることが多かった^[2]。ところが、欧米のダークツーリズム研究については、自然災害に関する分析がほとんどなされていないため、実際どのような人々が被災した地域を観光対象として訪問しているのかというその内実はよくわかつていない。

ただ、東日本大震災の復興過程において、被災地に観光客の出入りは復興ツアー等で確実に発生しているため、需要が存在していることは判明している。したがって、あとは適切な場で、適切な需要を喚起すればよいのであるが、問題はその手法である。

3. 従来型マーケティングの限界

これまで、被災地における観光客の掘り起こしは、復興ツアーに関するプロモーションをかけ、明るく元気に復興に向かう人々をともに応援しようとする流れの中で

旅へ誘っていた。

しかし、ダークツーリズムの根本的定義は、前述のとおり「戦争や災害をはじめとする悲しみの記憶をめぐる旅」であるため、復興と必ずしも関係なくともよい。また、復興から離れたところで、中越地震に関するいわゆる“エコノミークラス症候群”の悲劇や、奥尻の復興過程における公共事業の不正、東日本大震災にまつわる山田町のNPOの不祥事および石巻の瓦礫撤去に関する詐欺の話などは、災害に関連する大切な教訓を内包している^{〔注〕}。このように考えると、こうした災害に関する悲劇の場を訪れ、啓発的な効果を得るために旅は、決して明るく元気な復興過程に限定されるわけではない。災害発生後のダークサイドを、教訓として受け継ぐ旅もまた重要である。

こうしたタイプの旅を享受するツーリストは、前述の「明るく元気な復興ツーリズム」のプロモーションやマーケティングの対象にならないため、別途働きかけを行う必要がある。どこで、どのようにして、こうしたカテゴリーに属するツーリストを発見し、誘客することが可能であろうか。

これまで、日本の観光誘客は地域ベースで考えることが多く、コンテキストベースではあまりとらえられてこなかった。換言すれば、東北を訪れる人に、東北の魅力を様々な角度から伝えるということは熱心であったが、東北の災害を観に来る人々に、他の被災地のダークツーリズムを紹介するということはなされておらず、ここに大きなマーケティング上の見落としがあった。

東北の被災状況を観る人々は、雲仙普賢岳の火砕流にまつわる災害や2011年の紀伊半島における風水害の状況に關しても、一定の興味や関心があることが推定できる。このように考えると、雲仙普賢岳のがまだドームの來訪者に、東北の被災地への來訪をプロモーションすることは、災害への理解の深いツーリストを他の被災地に誘うことにはならない。これは東北観光に来るパイから被

災地旅行に来る人々を奪うわけではない。言いかえれば、全く違う地域にいた潜在的観光者を掘り起こしたことになるため、マーケティング効果は大きい。別の見方をすると、客を奪うのではなく、新しく客を掘り起す営為は、見込みがなかった客層にアプローチをかけるという意味で、客層を「開発」しているとも考えられる。芸術文化政策やアートマネジメントの世界では、これまでとは全く異なる新しいドメインから鑑賞者を育てることを「鑑賞者開発」と呼び、すでに存在している客に対するマーケティングとは分けて認識している^[3]。自然災害の記憶のある場所に、場所ベースではなくコンテキストベースでつなぐダークツーリズムの誘客は、新しい客の開発を行っていると捉えることも可能なため、アートマネジメントの方法論の一応用形態であるとも言えよう。

4. 観光者開発がもたらす本質的效果

観光者を開発することは、単に誘客の論点にとどまるわけではない。既存の被災経験地から、別の被災経験地へ誘客することは、被災地間のネットワークづくりにも貢献する。辛く哀しい体験をした者は、自己の体験を唯一無二のものであると認識しがちであるが、被災地間のネットワークやダークツーリストを通じ、各自の被災体験は相対化され、個別の体験を超えた教訓として昇華していく。記憶の承継と被災者の癒やしを考える際、こうしたネットワーク化と教訓の昇華は極めて有効に機能する。

1985年日の日航機墜落事故の際に、遺族間の連絡の核となった美谷島邦子氏は、その後、尼崎の福知山線脱線事故や東日本大震災における悲劇に関して、被害者や遺族のサポート活動を続けている。その方法論は、まさに悲しみの記憶をつなぐことにより、目的や効果として風化の防止などに言及している^[4] ^[5]。このように考えると、ダークツーリズムにおける観光者開発を、別の悲劇の記憶と結びついた他の場所で行なうことは、ダークツーリズムについてしばしば語られる倫理問題を考える上でも理にかなう^[6]。

5. 今後の方向性

筆者らは現在、阪神・淡路大震災をはじめ、雲仙普賢岳の火山灾害・中越地震・紀伊半島の水害に関連した場所で、東日本大震災への記憶の承継に関連する誘客の動線の構築の可能性を探っている。今後、具体的な進展があれば追って報告をしたい。

注

2004年の中越地震においては、災害による直接死よりも、いわゆる“エコノミークラス症候群”をはじめとする災害関連死が多かったことが報告されている^[7]。しかし、その教訓を承継するための仕組みは、現地の関連施設の展示を見る限り未だ不十分であり、今後の改善が期待される。

また、1993年の北海道南西沖地震で津波の大きな被害を受けた奥尻島は、早い段階から復興バブルが起り、当時の町長と出入りの業者の癒着が指摘されるようになっていった結果、地震から6年半を経て、町長は競争入札妨害で逮捕されるに至った^[8]。

東日本大震災のケースでは、山田町の“NPO 法人大雪りばあねっと。”が6億円を超える不当な支出を指摘され、町から損害賠償請求を受けるとともに、その一部は刑事事件となつた^[9]。また、石巻では、ボランティアの受入を行っていた石巻災害復

興支援協議会の代表者が、自身の会社でがれき処理を市から請け負ったものの、その一部の処理を無償のボランティアに行わせ、委託金の一部を横領するという事件を引き起こしている^[10]。

参考文献

- [1] 2016年4月9日配信 Yahoo ニュース個人、飯田一史「瀬戸内国際芸術祭が来場者100万人突破の陰で……乱立する「地域アート」の闇」藤田直哉対談（2016年5月8日URI確認）<http://bylines.news.yahoo.co.jp/iidaichishi/20160409-00056399/>
- [2] J.Lennon&M.Foley , Dark Tourism : The Attraction of Death and Disaster, Hampshire ,Cengage Learning EMEA, 2000
- [3] 河島伸子「アーツ・マネジメントと鑑賞者開発」川崎賢一・佐々木雅幸・河島伸子『アーツ・マネジメント』(放送大学教育振興会) pp.122-134,2002
- [4] 2015年12月11日朝日新聞朝刊宮城全県・29ページ「(11日に想う 震災4年9ヶ月)「遺族の力」被災地に 美谷島邦子さん」(2016年5月8日URI確認)<http://www.asahi.com/articles/CMTW151211040001.html>
- [5] 2015年8月12日毎日新聞朝刊東京本社・14ページ「特集面日航機墜落：事故30年 対談 ノンフィクション作家・柳田邦男氏／8・12連絡会事務局長、美谷島邦子氏」(2016年5月8日URI確認)<http://mainichi.jp/articles/20150812/ddm/010/040/023000c>
- [6] 大森信治郎「「復興ツーリズム」或いは「祈る旅」の提言：「ダーク・ツーリズム」という用語の使用の妥当性をめぐって」日本観光研究学会『(特集 東日本大震災と観光) 観光研究』24(1), pp.28-31,2012
- [7] 河川情報センター「新潟県中越地震 大地は震え、山々は崩れた 連続地震の恐怖が新潟を襲う」国土交通省河川局防災課災害対策室『災害列島2005 2004年の災害を振り返る』pp.36-42 国交省 2005
- [8] 2001年02月02日朝日新聞朝刊東京本社・3ページ「癒着の深み、おちた町長 奥尻島ゆがめた復興利権(検証)」等
- [9] 2014年02月05日朝日新聞岩手全県・27ページ等
- [10] 2014年10月31日朝日新聞宮城全県・27ページ等

謝辞

本研究の経費の一部は、日本学術振興会による科学研究費基盤研究(C)「日本型ダークツーリズムの確立と東北の復興を目指して」(研究代表者 井出明)、科学研究費基盤研究(C)「道の駅を活用した観光振興と防災インフラに関する研究」(研究代表者 麻生憲一)、課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業・実社会対応プログラム「効果的・持続的な災害伝承を目的とした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」(研究代表者: 佐藤翔輔)によって賄われている。